

「タチナガハ」から「里のほほえみ」へ

ー県内で新しい大豆の作付けが始まりますー

大豆は、県内で水田の重要な転作作物として栽培されていますが、湿害に弱く、収量が不安定なことなどから、昭和55年頃をピークに作付けは年々減っています。

これまでの県内主力品種「タチナガハ」は、品質がよく、機械収穫に適するため、県内だけでなく関東全域で多く作付けされてきました。しかしながら、近年、夏の高温や少雨の影響を受け、莢が茎葉より先に熟してしまう「莢先熟」や、莢着きが悪くなって茎葉がいつまでも青々している「青立ち」という障害が広範に発生し、作柄が不安定となりました。大豆は、秋に落葉し、茎が十分乾いてから収穫しますが、「莢先熟」や「青立ち」になると収穫時期が遅れ、大豆の粒が飛散したり、機械収穫を行うと粒が汚れ商品価値が低くなります。

一方、消費者の国産大豆への関心は高く、実需者は国産大豆の安定供給を求めており、増産が必要となっています。

このため「タチナガハ」に替わる品種の試験を行ってきました。

「里のほほえみ」は、ダイズモザイクウイルスに強く高品質な品種として、東北農業研究センターで育成されました。生育中に倒伏しにくく、機械収穫適性が高い品種です。さらに、莢がはじけ難い「難裂莢性」のため、損粒割合が非常に少なく、安定した収量が望めます。粒は「タチナガハ」にくらべて大きく、子実の蛋白含量が高いため、豆腐への加工にも適しています。

「里のほほえみ」は、平成27年度に埼玉県の奨励品種になりました。県内の大豆畑に順次導入される計画で、今後、県内の学校給食などで利用されていく見通しです。



図1 大豆の子実
(左：タチナガハ、右：里のほほえみ)

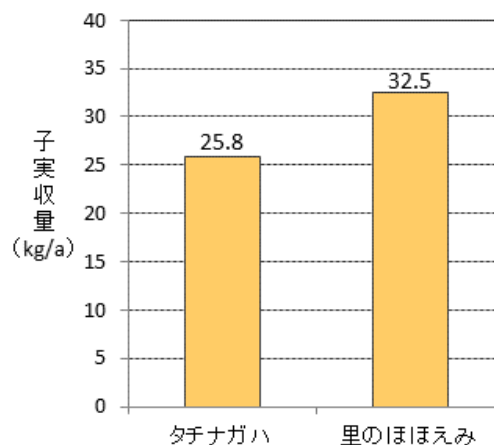


図2 子実収量の比較
(平成26年現地2か所の平均)

【問い合わせ先】

農業技術研究センター高度利用・生産性向上研究担当

電話：048-536-0311（代表） FAX：048-536-0315

<http://www.pref.saitama.lg.jp/soshiki/b0909/index>